

聖書：ヨハネの黙示録 2：8～11

説教題：死に至るまで忠実で

日時：2020年12月6日（朝拝）

アジアにある7つの教会に対する栄光の主キリストからのメッセージの2回目。今日見るのは第二の教会、スミルナ教会へのメッセージです。スミルナはエペソの北方約60キロメートルのところにあり、今日はイズミルという名の町があります。このスミルナ教会へのメッセージの特徴は、まず7つの主のメッセージの中で一番短いことです。全部で4節しかありません。また大きな特徴は主の叱責の言葉がないことです。ちなみに7つの教会の内、前回見た最初のエペソと最後のラオディキアの教会は霊的に危機的な状況にある教会でした。エペソの教会は初めの愛から離れてしまったと言われ、そのままでは「あなたの燭台をその場所から取り除く」と主から言われました。7つ目のラオディキアの教会も後に見る通り、大きな問題を抱えていました。それとは対照的に2番目のスミルナ教会と6番目のフィラデルフィア教会は忠実な教会として称賛されています。そして真ん中にある3番目、4番目、5番目の教会は、その中間の教会でした。このようにスミルナの教会は主に評価され、称賛されている教会だったことを心に留めて、この後を読んで行きたいと思います。

しかしこのことはスミルナの教会には何も問題がなく、ハッピーな状態だったということではありません。時は第11代ローマ皇帝ドミティアヌスによるキリスト教迫害の時代。スミルナのクリスチャンたちも厳しい戦いのただ中にありました。その彼らの苦難についていくつかのことがここに示されています。

まず9節で主は「わたしは、あなたの苦難と貧しさを知っている」と語られました。スミルナは当時、エペソと並ぶ大きな港湾都市で繁栄した町でした。そんな賑やかで栄えていた町なのに、その町の教会員は貧しい状態にありました。なぜでしょう。その地の教会は奴隷など社会における下層階級の人が多かったのかもしれませんが。Iコリント1章26節：「兄弟たち、自分たちの召しのことを考えてみなさい。人間的に見れば知者は多くはなく、力ある者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません。」しかしただ貧しいと言われているのではなく、「苦難と貧しさ」と、その貧しさが「苦難」とセットで語られていることを良く考慮する必要がある

と思います。スミルナはエペソと並ぶ大都市でしたが、同時に歴史的には早くからローマに忠誠を示して来た町でした。紀元 25 年頃に第 2 代ローマ皇帝ティベリウスのために小アジアに神殿を作る企画が持ち上がった時、スミルナは他の町々との激しい候補地争いに勝利して、神殿を建立し、献上しました。そのようにこの町はローマの権力と結び付き、ローマに忠実な市民であることを誇りとしていた町でした。そういう町でしたから、進んで皇帝礼拝に参加する人がより高い社会的な地位を得、経済的繁栄を得やすい状況があったと考えられます。反対にローマ皇帝を主と拝まないクリスチャンは、この町でこの世的に成功することは難しかった。商売をしても取引してもらえなかったり、仕事を見つけようとしても良い口を見出せなかったり、……。そんな中で彼らは貧しい状態へ追いやられていたと考えられます。

そんな彼らにイエス様は言われます。「わたしは、あなたの苦難と貧しさを知っている。だが、あなたは富んでいるのだ。」ここにこの世の評価と神の評価がいかに異なるかが示されています。この世の人々は貧しいスミルナ教会を見て、あのようにはなりたくないと思っていたかもしれませんが。しかし主はスミルナ教会を「富んでいる！」とはっきり仰います。これはいわゆる「繁栄の福音」と呼ばれるものと真っ向から対立する主の言葉です。繁栄の福音とは、主の前に正しい信仰を持っていれば、その人は地上でも健康が祝され、経済的にも祝福されると主張するものです。ある人が健康も祝され、この世の事業でも成功し、繁栄しているのは、神がその人の信仰を祝福しているからだとするものです。その視点からするとスミルナ教会はダメ教会になります。しかし主はスミルナ教会を神の前で大いに富んでいる素晴らしい教会だと称賛しています。何が神の前で富んでいることで、何がそうでないのか、この主の言葉の前で私たちはもう一度自らを考え直さなくてはならないと思います。

スミルナ教会の苦難の 2 つ目として、ユダヤ人だと自称しているが実はそうでない者たち、すなわちキリストを受け入れず拒絶するユダヤ人からののしられていたことが述べられています。クリスチャンはしばしばユダヤ人によって迫害されました。パウロの福音宣教はたいいそうでしたし、スミルナ教会もそうだったようです。「のしられていた」とは具体的にどういうことでしょうか。1 世紀後半の世界でキリスト教はユダヤ教の傘の下で保護を受けていたようです。当時、新しい宗教はローマ帝国では認められませんでした。ユダヤ人たちはローマ皇帝のために自

分たちが信じる神に祈り、礼拝することを特別に許可されてきました。しかしユダヤ人はクリスチャンたちを、自分たちの宗教に属する一派ではないとローマに告げる行動に出ました。するとキリスト教はユダヤ人の伝統的な宗教とは異なる新しい宗教と見なされることになり、迫害されることにつながります。その行動を指していると考えられます。

主はここで、そのユダヤ人のことを、実はそうでない者たちと言います。つまり肉的にはユダヤ人ではあっても、真の意味、霊的な意味ではユダヤ人、神の民ではないということです。むしろ「サタンの会衆」とまで言われています。ヨハネの福音書8章44節：「あなたがたは、悪魔である父から出た者であって、云々」。キリストを拒否し、キリストとキリストにつく教会を迫害する者たちはサタンの会衆に他ならないという主の宣言です。

このようにキリスト教信仰に忠実に歩むがゆえに、「貧しさ」と「ユダヤ人からの罵り」という苦難を受けていたスミルナ教会。その彼らにこれからもっとひどいことが起こると主は言われます。10節で、さらにあなたは苦しみを受けようとしていると。その結果、ある者たちは牢に投げ込まれるかもしれない。さらには「死に至る」、すなわち殉教の可能性が述べられています。

そんな彼らに主は励ましのメッセージを語って行かれます。あなたは何も恐れることはないのだと。その第一の根拠は、8節に記されている通り、キリストは「初めであり終わりである方、死んでよみがえられた方」であるということです。7つの教会に対するメッセージはいずれも、キリストはどんな方かについての宣言から始まっています。そしてそれらの言葉は1章ですで見えたキリストの姿から引き出されています。このスミルナ教会に対する「初めであり終わりである方、死んでよみがえられた方」は1章17～18節に出て来た言葉です。ちなみに来週見るペルガモンの教会に対して12節で「鋭い両刃の剣を持つ方が、こう言われる」と記されますが、それは1章16節に出ていました。次のティアティアラにある教会へのメッセージでは18節に「燃える炎のような目を持ち、その足は光り輝く真鍮のような神の子」と始まりますが、それは1章14～15節に出ていました。ですから1章で見た栄光に輝くキリストの姿はサラッと読んで終わりとするべきものではないのです。そのキリストの姿の一つ一つが7つの教会、ひいては全時代の全教会にとって大きな励

ましのもとになることです。そしてその一つ一つが、それぞれの教会の必要にピッタリ合致するものとして語られています。

スミルナの教会に対して主は「初めであり終わりである方」としてご自身を示されました。これはキリストが全歴史を最初から最後まで支配していることを意味します。そしてこの方は「死んでよみがえられた方」です。スミルナの教会員は迫害と死の危険に直面していましたが、キリストは彼らが直面するかもしれない死さえも打ち破った方です。1章18節にあったように、死とよみの上にも完全な支配権を持っている方です。たとえ彼らが信仰を貫くために死に至っても、キリストはご自身と同じく、死を越えて彼らをよみがえらせることができる。このいのちの主を仰いで恐れることは何もないとされています。

2つ目に「悪魔は試すために」とあります。このまま読むと試しているのは悪魔であるように読めますが、原文のニュアンスは異なります。直訳するところは「悪魔はあなたがたの内から何人かを牢に投げ込もうとしている」とまず記され、その後「それはあなたがたが試されるため」と書かれています。ここにあるメッセージは何でしょうか。それはここに神が積極的な良い目的を持っているということです。悪魔は彼らを滅ぼそうとして活動しますが、神はこれによって彼らがテストされるようにしておられる。テストを経て本物であることが証明されるようにこのことを許しておられるということです。あのヨブの試練もそうでした。サタンは悪い意図をもってヨブに襲い掛かりましたが、神は良いご計画をもってそれを許可されました。神は様々な試練を通して私たちの信仰をテストされます。それによってそこに信仰があることを証明するように導かれます。またただ証明するだけでなく、私たちの信仰が精錬されるように導かれます。金属は火で精錬されることによって不純物を燃やし尽くし、一層その金属を価値あるものに高めます（Iペテロ1章7節参照）。試練はそのような効果を私たちに対して持っています。この世的な性質を焼き尽くし、罪を燃やし尽くし、一層主への信仰に生きる者となるようにと。

3つ目にこの苦難は「十日の間」と言われています。これは24時間×10日間という意味ではなく、黙示録の他の表現と同様、象徴的に取るべきでしょう。その意味はその期間は限定されているということです。2～3日に比べれば10日は長いかもしれませんが、しかしそれほど長い期間でもない。むしろある意味で短い期間と言

えます。主は主権をもって、その期間を限定しておられる。だからこの主を見上げ、信じて、恐れることなく、死に至るまで忠実でありなさい！とされています。今まであなたがたがそうであるように、これからも最後まで！と。

そのように勝利する者に対しての約束が最後に2つ書かれています。一つは「あなたにいのちの冠を与える」ということです。スミルナは競技の盛んな町で、彼らにこのイメージは良く伝わるものだったと思います。競技の勝利者には栄冠が与えられます。そのように信仰のレース、信仰の馳せ場を最後まで走り抜いた者にいのちの栄冠が与えられる。主はそのゴールでこの冠を授けるために、私たちを待っていてくださる、と。

もう一つの約束として 11 節最後に「決して第二の死によって害を受けることはない」とされています。第二の死については後に 20 章や 21 章に出て来ます。たとえば 20 章 14～15 節：「それから、死とよみは火の池に投げ込まれた。これが、すなわち火の池が、第二の死である。いのちの書に記されていない者はみな、火の池に投げ込まれた。」 第一の死はこの世で私たちみなが経験する死のことです。しかし聖書が言うところによれば、それですべてが終わりではない。第二の死がある。それは死後に待ち受ける本当の意味での死、永遠のさばきのことです。多くの人々は第一の死ばかりを気にして第二の死はほとんど気にかけません。しかし真に恐ろしいのは第二の死です。それはやがての新しい天と新しい地の栄光の状態から排除され、永遠に神の御前から投げ捨てられることです。たとえこの世で幸せに生きても、第二の死に投げ入れられたのでは何の良いこともありません。しかし主に忠実に人は、たとえ悲惨な第一の死を味わっても、最も恐ろしい第二の死に直面させられることはありません。それを免れ、むしろいのちの冠を受け、永遠のいのちに生きる者とされる。これこそ私たちが心を高く上げて何よりも追い求めるべき祝福ではないでしょうか。

このスミルナ教会へのメッセージを読む時、触れずにいられないのはスミルナ教会の監督であったポリュカルポスという人の話です。彼は紀元 155 年、迫害の中、火あぶりの刑で殉教しました。棄教するように迫られた時、彼はこう答えたと言います。「86 年間、私はキリストに仕えて来ました。そしてキリストは私に何も悪いことをなさいませんでした。どうして私は救い主である私の王を冒瀆することがで

きるでしょうか。」と。ヨハネの黙示録が90年代半ばに書かれたとすると、ポリュカルポスは当時20代後半であったと考えられます。この黙示録がスミルナ教会の礼拝で朗読された時、彼はそこにいたかもしれませんし、あるいはすでに監督であったなら、彼がこの書を朗読したかもしれません。まさに自分の教会に向けて語られた「死に至るまで忠実でありなさい」という主のメッセージが、殉教直前の彼の心の中に響いていたに違いありません。彼はそこで脅す相手にこうも言ったそうです。「あなたはしばらく燃えてすぐに消えてしまう炎で私を脅している。それはあなたが、やがて来るさばきと永遠の刑罰において不敬虔な者を待ち受けている炎を知らないからです。」つまり第二の死における炎こそを恐れなければならないということです。こうして彼はキリストの命令に従い、その者に約束された祝福を受け取る者となったのです。

主は忠実に歩んでいたスミルナ教会に最後まで忠実に歩み続けるようにと励まされました。その歩みを貫くために、この世で生活が難しくなること、経済的に厳しい中に置かれることがあるかもしれません。しかし決して譲ってはならないことは、主に忠実に歩むこと。主は私たちの歩みを今日も、すべてをご覧になり、知ってくださいます。またその主はすべてを支配しておられる方であり、すべてのことを通して私の信仰を強め、磨き上げ、高価なものにしようとしてくださいます。その主を見上げて、主に忠実であることを第一に大切なこととして歩む者たちでありたいと思います。そしていのちの冠を手にして、それを授けようとゴールで待っていてくださる主の懐についに飛び込む歩みへ、そして第二の死を免れ、永遠のいのちを豊かに受け取らせていただく真に幸いな歩みへ導かれて行きたいと思います。